

## 岡崎久彦先生追悼

愛甲次郎

大兄故粵王岡崎久彦大使の御前に文語の苑代表幹事愛甲次郎謹みて申す

吾初めて大兄に親炙す二子玉川氣功の道場、稽古終りて杯を交す富士觀會館の上層階、風雅の談論屢々靈界を逍遙、異次元の實相を觀ず。大兄當に和漢洋のみならず十方世界を包含、通曉し給ふ。時に論偶々文語に及び、戦後の教育文語を棄て、顧みざるの結果、我が國文化を傳へ來たる國語、徒らに輕佻に走り浮薄の言説國を危くすと嘆き給ふより、文語の復活を唱道するの運動萌す。平成癸未（十五年）如月二十五日、はつかあまのいつか當時神田錦町の博報堂研究所にありつる岡崎研究所にて初めて運動の名稱及び會則を議す。議事畢りて大兄我等を神保町の麥酒旗亭に案内せらる。戦前を彷彿せしむるけはひ、前途を勵ましぬ。その後岡崎研究所は虎ノ門の海洋船舶ビル、永田町のパレロワイヤルへと移るも、文語の苑幹事會には常に同所會議室を御提供賜り、閉會後は虎ノ門、山王界隈の酒肆へ大兄の御芳情に甘え、酒食を共にし萬般に亙る御指導賜りしことの數々、吾が人生にて最も楽しく有益の時を過ぐしけりとこそ思ひ出でらるれ。

文語の苑の定例的活動は、文語文による會員の作品を電網に上架して博く世人の目に觸るゝを主たる目的とす。大兄率先して名文を物し給ひ、これを收むるに粵王寓となす。中に通算約七年間に亙る長期連載三篇、「蹇蹇錄」評解（三十七節）、朝鮮史散策（二十六節）、朝鮮中世史散策（十七節）、その他諸葛亮孔明の「出師表」評解、日韓併合百年を繞る漢詩解題あり。遺稿となれる「集團的自衛權偶感」はその容認を決斷せられたる安倍總理へ獻ずるの漢詩實韻七言古詩なり。すべて今後の世界的變動に處するに必須の卓見にして、これを小冊子に纏め御前に供へ奉り、吾等折にふれ熟讀玩味せむ。

文語の苑の年度中行事としてシンポジウムの開催あり。昨年度地方開催の二回目として福井市にて「越前と若狭ゆかりの文語」と題して催すを得たり。當日福井の空晴れ渡り、參加者補助席に滿つ。然るにその日大兄世を去り給ふ。安倍總理の御弔電にも「集團的自衛權偶感」の言及ありて、失ひけるものの大きさに感涙誘はるゝを如何にせむ。

大兄の御靈よ願はくは天上の御冥福と御遺族の御多幸の久しからむことを。而して又吾等大兄の遺業を全うせむとの志を安らげく聞し召し給はらむことを。

平成乙未 四月八日